

## 弥生人は豚を飼っていた！ 古代史の常識ぞくぞく訂正

かの「邪馬台国論争」一つをとって分るようには、日本の古代史については、まだ謎や未知の部分の方が多いといってもよいくらい。

それだけに「これはこうだ」と言い切れる定説も少なく、研究が進むにつれて、これまで推理にすぎなかった学説が、あっさりくつがえされるといった「逆転劇」を楽しむこともできる。

その一つに、わが国にはいつ頃から牛や馬がいたかという問題があり、これまでのところ、少なくとも縄文時代には存在していたとする説が有力だったが、「フッ素分析法」という年代測定法によると、動物の骨は、長く土中にあるほど多量のフッ素を蓄積することが分かり、その蓄積量から逆算すると、縄文時代にわが国に牛馬がいたかどうかは、はなはだ疑わしくなったという。

古代遺物の宝庫といわれてきた「貝塚」などで見いだされる牛馬の骨なども、後世になって捨てられたとみられるものが以外に多く、確かなところは、わが国に最初に馬が出現したのは六世紀と、従来の縄文説が大きく揺らいで来た。

一方、豚についても、その先祖であるイノシシは、その生態からみても、わが国の場合、

必ずしも大陸から渡来したり、移住してきたものとみる必要はなく、もともと日本列島にいたものが、先住民である日本人の先祖によって馴化じゅんかされ、豚になったとみられていた。

ただ、問題は、それがいつごろからだったかということだが、大分県の、ある弥生時代の遺跡から、一見イノシシのものとみられる頭骨が発見されたが、研究の結果、この頭骨には歯槽膿漏しそろうのあとがあり、疑いもなく豚のものであることが分かったという。

歯槽膿漏は、野生のイノシシには見られないもので、このことから、われわれの先祖は、稲作の始まりといわれる農耕時代の幕開けから「貴重なタンパク源」を道連れにしていたことが分かったのである。

### ワンポイント・知識

#### 牛トリーサビリティ制度

牛の個体識別のため、国内で飼養されるすべての牛の両耳には、十桁の個体識別番号を表示した耳標が装着されています。

この番号により、何か問題が起ったときに、生産から流通・小売りに至るまで追跡し、原因を究明することが出来ます。

また、商品の回収を最小限の範囲で迅速に行うことも出来ます。